文教大学女子短期大学部研究紀要43集，13－20，1999

カントにおける感情の概念

村 野 宣 男
英語英文科

Kant's Concept of Feeling

Nobuo Murano
Department of English Language & Literature

カントの『純粋理性批』では、感性（Sinnlichkeit）と悟性（Verstand）の二つの心的能力によって認識が形成される経緯が説かれている。ここでは、感性は受動的であり、物自体の触発により諸々の感覚（Empfindng）が生じてくるのに対して悟性は能動的な働きをなすものとされている。ところで、われわれの心には、感覚と近縁関係にあると思われる感情（Gefühl）が存する。われわれは日常的に、感覚にかかわると同時に感情に強くかかわっている。われわれの精神は、感覚と悟性によって形成された認識によると同様、あるいはそれ以上に感情によって方向づけられている。ここに、感情とは何かということを考察する意義が存するのである。

感覚と感情は、同様の論理で把握されるものであろうか。すなわち、感情も感覚と同様に全く受動的なものであり、感情は感覚を生みだす感性によるものであるということができるであろうか。カントの感情に対する理論をみるとき、感覚と感情の同一視は全くの誤りであることが知られる。感覚は、悟性によって認識過程の中に組み込まれることによって意味をもつこととなるが、感情はそれ自身精神の自律的な働きである。感情は、われわれの精神において大きな主体的な役割を果しているのである。カントは、感情に関しての考察を『判断力批判』（1790）において行っている。『純粋理性批判』（1781）と『実践理性批判』（1788）によって、理性に対する考察がなされた後、感情の役割について考察されることとなったのである。本論では、主として『判断力批判』に依り、感情の基本的な概念の把握を試みるものである。

1

天空に輝く星をみて、古代の人々は霊的な感情を懐き占星術を形成し、近代では科学的考察を加え天文学を生んだ。前者では、美的・感情的判断がなされ、後者では理性的・認識的判断がなされていると考えられる。しかしながら、両者には共通な働きが見られるのである。それは、構想力（Einbildingskraft）である。構想力は想像力であるが、現前にないものを思い描くところの想像力たる再生的構想力（eine reproduktive Einbildingskraft）のみを意味しない。創造的な想像力たる産出的構想力（eine produktive Einbildingskraft）も存するのである。美的・感情的判断において、構想力が働くのは当然といえるが、認識においても重要な働きをなしていることに注意しなければならない。構想力の概念は『判断力批判』で大

きな意味をもつのであるが、この概念は認識論の脈略において詳説されている故に、『純粋理性批判』に依って構想力について触れることにする。

カントは、“感性なしにはいかなる対象も与えられないが、悟性なしにはいかなる対象も思惟されない。内容のない思惟は空虚であり、概念のない直観は盲目である。”[1]と述べ、認識において、感性に対して悟性と同様の重みを担わせている。しかしながら、認識における悟性と感性の役割をみるとき、悟性が主導的である。カントにおいては、認識は自我の主体的構成であるという考え方が一貫している。認識というのは、即自的に存在する世界を自我が受動的に受け入れるところに成立するのではない。むしろ、自我が認識的世界を創り出すのである。ここには従来の認識論に対するコペルニックス的転回[2]がある。

認識は、悟性のカテゴリーと直観[3]との先天的綜合により形成されるのであるが、両者は単純に綜合されるのではない。一方には、悟性の先験的なカテゴリーが存し、他方には無規定な直観が存する。両者が結合して認識が成立するのであるが、水と油のように異質な両者がいかに結合し得るのであろうか。カントは、時間は先験的性格をもつ感性であると考えている。又、あらゆる直観は時間の中にある。そして時間は論理をもつのであるが、時間の論理がカテゴリーの論理と重なり合うころに直観とカテゴリーが結びつくとするのである。しかし、この結合においては構想力が働いているのである。例えば、タバコと肺癌が因果関係にあるという認識の背後には、因果関係のカテゴリーと時間における規則的連続という論理がかかわるが、同時に構想力が大きな役割を果している。すなわち、タバコと肺癌が因果関係にあると知るためには、まずタバコと肺癌の認識が必要である。ここでは、タバコと肺癌が一種の実体として存在することが前提されるのであるが、ここに、時間を通して直観を一つの形にまとめて、それぞれが持続するという構想力（想像力）が働いている。この認識が成立した後、時間の流れの中において両者が因果的に関係しているという構想力（想像力）の働きを通して、タバコと癌の因果関係が知られてくるのである。構想力は、悟性と直観の要素をもちながらそのどちらにも属さず自由に働く独自の精神の能力といえよう。このようないわば、生命的な構想力の働きが現象の多様性をまとめ悟性的カテゴリーに結びつけるのである。“構想力はそれ故、アプリオリな綜合を行う能力である。それ故にわれわれは、構想力に対して産出的構想力（die produktive Einbildungskraft）という名を与える。そして、構想力が現象の多様性に関して多様性の綜合における必然的統一を目標とする限りにおいて、この統一は構想力の先験的機能と名づけられるのである。”[4]といわれる。現実に何ものかの間に因果関係を設定するときに、想像力あるいは構想力を働かせていることを強く意識するであろう。むしろ、直観やカテゴリーは抽象的である。構想力が直観とカテゴリーを媒介するというよりは、構想力の働きの側面として、先験的カテゴリーと直観が存するといえるのではなかろうか。デーヴィッド・ヒューム（David Hume, 1711-76）も、認識における想像力（imagination）の役割を強調している。[5]但し、ヒュームには、時間やカテゴリーに関しての先験的考察がみられない。したがって、カントでは認識に対して普遍性が与えられるのに対して、ヒュームの認識は、あくまで相対的であった。

直観と悟性のカテゴリーが構想力によって結びつけられることによって認識が成立する。このことは感性と悟性が構想力によって結びつけられることでもある。“二つの端、すなわち感性と悟性は、構想力というこの先験的な機能を媒介として必然的に結びつけられねばならないのである。”[6]しかしながら、構想力によって感性と悟性が結び

つくためには、尚、図式（Schema）が媒介となり、純粋悟性の原則（Grundsätze der reinen Verstand）に従わねばならない。図式とは、概念的認識のための見取図であり、構想力の先験的産物（ein transzendentales Produkt der Einbildungskraft）[2]といわれている。原則とは、構想力や図式によって認識に向かって形成されてきた形を、感覚的現実に適合させて行くところの具体的指示といえる。この最後のプロセスを疎かにすると、空想的となったり、独断的となったりする。このようなプロセスが正確に機能することによって、正しい認識が得られてくるのであるが、現実には諸々の欠陥の故に誤るのが通常である。しかし、本論では、認識における構想力の働きに注目することにし、認識のプロセスの詳細には触れない。認識におけると同じ構想力の働きが感情における判断にも大きな役割を果たすことから、構想力について注目したのである。

2

『人倫の形而上学』の序論において、カントは、感覚と感情を次のように区別している。“人は、表象（Vorstellung）に対して快又は不快を持つ能力を感情（Gefühl）と名づける。何故ならば、快も不快もわれわれの表象とのかかわりにおいて単に主観的であり、対象の可能的経験に対する客体（Objekt）とは何のかかわりももたないからである（又、われわれの状態の認識とも何のかわりをもたない）。一方、諸感覚（Empfindungen）は、主観の特性の故に諸感覚に属している特質（例えば、赤とか甘さなど）の外に、認識を構成するものとして客体にかかわるのである。快や不快は、（［感覚としての］赤や甘さにおける感情であるが）客体における何ものをももつことはなく、単に主観に対する関係を表すのである。”[8]認識においては、主観（Subjek）と客体（Objekt）が存する。感覚は、客体にかかわり認識の中に組みこまれるのであるが、感情は主観のみにかかわり認識とは関係がない。

カントは、人間の心の能力（Seelenvermögen）を三種に分類する。[9]一つは認識能力（Erkentnisvermögen）であり、二つは欲求能力（Begehrungsvermögen）である。欲求能力には、道徳的意志による実践的な能力も考えられている。そして、快・不快の感情（Gefühl der Lust und Unlust）の能力は、これら二つの能力とは異なる第三の能力とされるのである。感情は、主観的なものとして、理論理性の観点からは、認識にかかわる感覚と区別されたが、実践理性の観点からも感情を行動の原理とすることが厳しく批判されている。感情は、変動し、相対的であり実践的当為の論理と矛盾するからである。[10]このように、感情は理論的にも実践的にも理性から区別されるのであるが、一体どのような性格をもつのであろうか。実は、理論理性と実践理性と区別されながら、尚かつ両者とのかかわりをもつという性格が感情にはある。

3

『人倫の形而上学』における感情の定義においてカントは“人は表象（Vorstellung）に対して快又は不快をもつ能力を感情（Gefühl）と名づける”としていたが、表象の概念は感情を理解する上で重要である。カントは、現象（Erscheinung）とか対象（Gegenstand）と区別された表象（Vorstellung）という概念を立てる。現象や対象は、認識の脈絡において言われるのに対して、表象は、認識的判断と感情による判断の双方の出発点たるものとして考えられている。まず表象があり、そこから認識あるいは感情が存するといえる。例えば、月を見て天文学の対象とすることもできれば、美しいと思うこともできる。月を見て、天文学の対象とする人も美しいと思う人も、同じ月の表象に接しているのである。カ

ントは次のように述べる。“われわれの表象の主観的性質（das Subjektive）は、客観の認識のために客観に関係づけられる場合がまず考えられる（認識は、形式と内容に従って行われる。形式に関しては純粋直観、内容に関しては感覚である)。この場合、考えられた表象を受容するものとして（als Empfanglichkeit der gedachten Vorstellung)の感性は感覚(Sinn)である。次に考えられるケースは、表象の主観的性質が認識を構成するものとはならない場合である。この場合、主観的性質は表象の主観に対してのみ関係し、対象の認識に利用できるものは何ももたない。この場合、表象のこのような受容性は、感情（Gefühl）と呼ばれる。感情は、表象（これは感覚的でもあれば、知的でもありうるのだが）の主観への働きを含んでおり、感性（Sinnlichkeit)[11] に属している。しかし、表象それ自身は、悟性あるいは、理性に属していることが可能である”[12] 月という表象は、天文学の対象ともなれば、美的な対象にもなるが、すでに表象の段階で、悟性や理性が働き、表象は考えられたもの（gedacht）とされている。しかし、表象は、いまだ認識されたり美的に判断されているものではない。このような、いわば過渡的存在としての表象にわれわれはまず出合うのである。細谷昌志は、このような表象の性格について次のように述べている。“われわれがあくまで「表象」の地平に留まりそこで思惟しようとする理由は、なによりも表象を「哲学の出発点」として位置づけることができる、と考えられるからにほかならない。具体的にいえば、われわれが哲学的思惟を始めるとき、その出発点となるのは「主観」でも、「客観」でも、「主客同一」でも「主客未分」でもなく、端的に「表象」からでなければならない。”[13]

表象の段階では、いまだ認識や感情による判断には至っていないが、すでにこの段階において悟性や理性がかかわっているとされる点は重要である。このことは、表象においてすでに構想力の働きがあることを意味している。例えば、月の表象が一定のまとまりをもつ以上、ここでは構想力の働きを認めることができるのである。しかし、構想力の働きは、認識の方向に展開するか、あるいは、感情の方向に展開するかの二方向をとるのである。認識のプロセスの大略は、本論１節で述べられたが、表象から認識に至るためには、表象の中に働いている構想力が具体的経験の脈絡の中に入れられなければならない。すなわち悟性の原則に従わねばならない。感覚に結びついた経験的な地盤の上に立つ原則に従うことによってはじめて認識が成立するのである。

しかし、表象を経験的認識へと方向づけることなく、主観的感情の働きに関係づけることもできる。ここには、感情による判断がある。この場合、構想力は認識という制約にかかわることがない。すなわち、原則に従うことなく自由に活動することができる。カントは、このような構想力の自由な活動のことを“構想力と悟性の自由な遊戯（das freie Spiel der Einbildungskraft und des Verstandes)[14]”と呼んでいる。ここでは、単に“構想力の自由な遊戯”といわずに、“構想力と悟性の自由な遊戯”といわれている。構想力の働きには、自から悟性の働きが伴っている故にこのように言われているのである。カントは次のように述べる。“この表象によって遊戯の状態に置かれる認識力［構想力と悟性］は、この場合自由な遊戯の状態にある。なぜならば、いかなる規定的なる概念も構想力を特別な認識原則へと制約しないからである。それ故に、この表象における精神状態は、一定の表象における表象力の自由なる遊戯のもつ感情という精神状態であり、これは［美的］認識にかかわるのである”[15]

4

しかしながら、構想力と悟性の自由な遊戯が全く恣意的なものとなるならば、そこには感情の無政府状態が出現することになろう。ここでいう自由とは、認識的かかわりからの自由ということであり、無秩序を意味しない。感情にも、無秩序なるものと秩序あるものがあり、ここに感情の評価の問題が生ずる。

カントは、『判断力批判』第一節の冒頭において、“何ものかが美であるか否かを判断するために、われわれは表象を悟性によって認識の客体に関係づけるのではなく、構想力（たぶん悟性と結合されているのであるが）を通して主観ならびに主観の快・不快の感情に関係づけるのである。趣味判断はそれ故、認識判断ではない。したがって論理的判断でもない。そうではなく、趣味判断は美的（asthetisch）であり、その根拠が主観的である判断に外ならない。”[16] ここから判断すると、構想力と悟性の自由な遊戯は、快を生みだすとき正当に機能していることになろう。構想力と悟性の正当なる働きと快とが同値であると考えられるからである。

しかしながらカントは、構想力と悟性の正当なる働きの根拠を快とは異ったところに置くのである。カントは判断力の究極的根拠を主観的・感覚的なものに置くのであるが、それは、快より更に一歩踏みこんだ感覚たる美的感覚によるものとされるのである。カントは、構想力と悟性の自由な遊戯が正当に機能するときは、構想力と悟性の調和（Harmonie, Zusammenstimung）[17] が存するというが、まず美的な判断が最初になされることによって、構想力と悟性の調和が確立し、その結果として快が得られるとされる。『判断力批判』の九節のタイトルは「趣味判断において、快の感情が対象の判断に先行するか、あるいは対象の判断が快の感情に先行するか」と題されている。ここで対象の判断とは、認識的判断ではなく美的判断を意味している。カントはここで、美的判断が快の感情に先行することを主張して次のように述べる。“表象を通して対象（Gegenstand）が与えられるのであるが、対象又は表象に対するこのような純粋に主観的（美的な）判断は、対象に対する快に先行するのであり、認識能力［構想力と悟性］の調和における快の根拠である。”[18] 更に九節において次のように言われる。“さて、しかしながら、趣味判断は、概念とは関係なしに判断の客観を適意（Wohlgefallen）あるいは美（Schönheit）の観点から規定する。しかし、この関係の主観的統一性は、ただ感覚（Empfindung）によって知られるのである。二つの能力（構想力と悟性）を活気づけて、動因として与えられた表象を通して一定の統一した活動、すなわち［美的な］認識一般に属している活動へともたらすものは、感覚である。そしてこの感覚の普遍的伝達性を趣味判断は要請している。”[19] ここでいう感覚とは美的な判断能力である。趣味判断とは美的判断と同義であり、これは適意と美の観点からの判断であるとされている。適意は快に近い意味をもつように思えるが、これとは区別され美と同義である。美的判断力たる感覚に活気づけられて（Belebung）構想力と悟性に調和がもたらさるものである。

快の感情をもつとき、先行するものとして、美的判断がなされているのである。一方で、快・不快の感情は一つの能力とされているので、美的判断の能力が優先されるものと考えることができる。カントによると、感情たる快は、受動的（patologisch）なものではない。[20] 表象に対する何等かの積極的な判断である。しかしながら、快・不快は何等かの受動的ニュアンスをもっていると考えられる。そこで、カントは、快・不快の概念とは別により積極的な意味をもつ美的判断を立て、快・不快の感情に優先

させたと考えられる。この考え方は、カントの主体性を重視する考え方、すなわちコペルニックス的転回と関係してくるのである。カントの哲学におけるコペルニックス的転回は、認識的判断に止まらず、実践的・美的判断にもかかわってくる。認識における自律は現象界、実践における自律は自由（物自体）とかかわりをもつ。しかし、美的判断力は、認識や実践のように表象を通しての世界あるいは物自体との内容的かかわりではなく、表象の形式（Form）とのかかわりである。[21] この意味で美的判断は極めて主観的である。認識や実践が、現象や行為といういわば現実的な制約を受けているのに対して、判断力は、構想力と悟性の自由な遊戯に身を置いている。この意味で美的判断の自律は、認識や実践におけるよりもより自由であり自律的であるといえる。カントは、認識や実践における自律をAutonomie（自律）としたのに対して、美的判断力における自律をHeautonomie（自己自律）とした。カントは次のように述べる。“判断力はそれ故に、それ自身において、自然の可能性に関してアプリオリな原理をもつのである。しかし、単に主観的観点からである。この原理によって判断力は、自然に対して（自律として）ではなく、自己自身に対して（自己自律として）、自然の反省のために、一つの法則を指定する。”[22] 構想力と悟性は自由な遊戯の中にある。しかし、構想力と悟性が調和し、そこに快の感情が得られるためには、まず、自己自律になる美的判断が存しなければならない。

5

美的判断は、自己自律によってなされるのであるが、同時にこの判断は普遍妥当であり、合目的的（zweckmäβig）であるとされている。カントは、科学的法則に基づく多様な自然の中に、法則の秩序以外の秩序（例えば、類と種）を見出すのは、悟性のなすところではなく判断力（Urteilskraft）が要請されるとして次のように述べる。“この目的を達成するには、快の感情がかかわっている。そして、この目的の達成の条件として、すなわち反省的判断力一般の原理としてアプリオリな表象が存するのであるが、快の感情は、アプリオリな根拠によって全ての人に妥当するように規定されるのである。そしてこの場合、合目的性の概念は、客観が［美的］認識能力にかかわることによって成立するのであり、欲求能力に関しては一切考慮しない。したがって自然の実践的合目的性とは全く区別されるのである。”[23] ここには、美的判断におけるアプリオリな原理について触れられている。すなわち、感覚的な美的判断にはアプリオリな原理が存するのであり、それは合目的性である。ここに、判断の普遍妥当性の根拠がある。すなわち、美的判断は合目的性というアプリオリな形式を伴うのである。しかしながら、この判断はあくまでも美的感性によってなされるのであって観念的なものではない。

『判断力批判』は第一部・美的判断力の批判（Kritik der asthetischen Urteilskraft）と第二部・目的論的判断力の批判（Kritik der teleologischen Urteilskraft）によって構成されており、合目的性の概念は両者にかかわるものとして重要ある。合目的性は一定の秩序性と捉えることができる。この秩序性は、科学的法則とは異なった次元の美的秩序であるが、一律ではなく、単なる美的なものから実践理性の秩序へと接近するものもある。先の引用の中でカントは、美的合目的性は実践的観点の合目的性と異なると述べていた。たしかに、美的判断と実践的判断は異なるのであるが、美的感情には諸相があり、類と種の秩序のように素朴なものから実践的秩序性へと接近するものもある。『実践理性批判』の結

論の章の冒頭は次の文章で始まっている。“幾度もそして持続して考えれば考えるほど、より新しいそして増大する感嘆と畏敬をもって心を満たすところのものが二つある。それは輝く星によって散りばめられた私の上にある天空と私の中にある道徳的法則である”。[24] 判断力は、認識的判断と実践的判断の仲介となすものであるとカントは述べるが、その大略を述べてみる。

認識にかかわる理論理性と道徳にかかわる実践理性は、理性という大枠において関連している。認識は経験的形式に限られるのであるが、われわれは認識において使用する思考パターンたるカテゴリーを経験の領域を越えて超越的（traszendent）に使用する。例えば、因果関係を無限に遡っていくことができるのである。カントは、このような超越的思考は悟性ではなく理性によるものとしたのであるが、この理性の働きから理性の理念たる自由（Freiheit）が存することとなる。すなわち、世界（Welt）という統一理念を考えるとき、因果関係の無限遡及ということがあってはならない。無限ということは統一と矛盾する。又、理性は統一的世界を要求する。したがって自由による原因が考えられねばならないとされる。このように理性の理念として立てられた自由は、道徳的関係を成立させるための必要な要因とされる。自由意志の概念なしには、自律的道徳的関係は成立することはないからである。このように、理論理性と実践理性は自由を媒介として関係づけられる。すなわち、自由という観点からは、同じ枠の中にあるといえる。しかし、両者のかかわりはいわば観念的である。理論理性の自由は理論的に要請されたのもであり、実践理性の自由は実践的に要請されたものであり、それぞれ別の方向に顔を向けている。このような状況の中において、理性とは異なる感情が認識的世界と実践的世界を結びつけるという構図がある。すなわち、表象を認識的ではなく美的に捉えることによって実践的領域に接近することができるのである。表象を認識的に捉える限りでは、自由の概念が生じてもあくまで観念的である。同じ表象を美的に捉えることによって、実践的に生きた自由の世界に接近することができる。輝く星に散りばめられた天空を仰ぐとき、無限な深淵の世界に誘われ、思弁的理論理性の働きが、神秘的に感性化されるということができる。そしてここで働く神秘的感性は、自由という形而上学的存在にかかわっているのであるが、同じく自由を基盤とする道徳法則に対する感性と同調するものと考えられる。カントは次のように述べる。“認識能力［構想力と悟性］の調和は、この快の根拠となるのであるが、この認識能力の遊戯における自発性は、道徳的感情に対する心の感受性を促進することによって自然概念の領域と自由の概念の領域の結合の媒介（Vermittlung）として役立つのである”[25]

以上のことは、次のように言い直すことができよう。人間の心的能力には、認識能力・感情の能力・欲求能力の三者がある。それぞれの能力には、皮層的な段階と深化された段階があると考えられる。この違いは、反省の有無による。認識能力が深化されるときに、悟性から理性の働きに移り、超越的思考が生まれ、理念に至る。又、欲求能力は、皮層的な段階では単に感性的欲望に止まるが、反省的になるときには、道徳的意志へと深まって行く。感情の能力の場合も、皮層的な段階では、単に“快適（angenehm）”であるが、反省が伴うとき“美（schön）”という感情となり、更に超越的反省が加わると“崇高(erhaben)”という感情に至る。これら三つの能力は、皮層的な段階においては、それぞれ異なった次元にあるように見えながら、反省においては、互いに関り合うと考えられる。三つの能力は反省を通して、経験的領域を超えた超感性界

すなわち叡知界とかかわるのであり、叡知界を通じて三者は関連し合うのである。反省的ということが三者について問題とされること自体が、三者の根源的関りを示している。又、反省的であることが、理性的であるとするならば、三者は理性に関り合っているということもできよう。カントは次のように述べている。“……趣味判断が赴くところは、われわれの上級認識能力が赴くところと同一であり、それは叡知界（das Intelligibel）なのである。[26]”“判断力は、主観における内的可能性、および主観と一致する自然のもつ外的可能性の故に、主観自身の内にあり且つ外にある何ものか、すなわち自然でもなければ自由でもないもの、しかしながら自由の根拠である超感性的なもの（das Übersinnlichen）に結びついているのである。そしてこの超感性的なるものにおいて、理論的能力は、共通的であるが知られざる方法において実践的能力と統一的に結合されるのである。”[27]このように、認識的能力、感情の能力、実践的能力の三者は、超感性的叡知界を通じて関わり合うのであるが叡知界あるいは超感性的なるものは、認識的・実践的理性にとって観念的なものでありながら、感情にとっては直接的である点に感情の特異性がある。ここに、感情が理性の媒介項である所以があると考えられる。

〔注〕

カントの著作の引用は、全てアカデミー版（Kant's Gesammelte Schriften, Herausgegeben von der Königlich Preussischen Akademie der Wissenschaften）による。巻数と頁数を記す。尚カントの著作は次のように略す。

Krv : Kritik der reinen Vernunft（純粋理性批判）

Kpr : Kritik der praktischen Vernunft（実践理性批判）

Ku : Kritik der Urteilskraft

Ms : Metaphsik der Sitten

1）Krv, 4, 48.
2）Krv, 3, 12.
3）直観（Anschauung）は、感性が物自体に触発され、いまだ概念化されない直接的存在。
4）Krv, 4, 91.
5）ヒュームはA Treatise of Human Natureの中で、認識における想像力の役割を強調している。カントはヒュームの影響を受けているが、想像力の概念もヒュームからの影響によると考えられる。
6）Krv, 4, 91.
7）Ibid., 142.
8）Ms, 6, 211～212.
9）Ku, 5, 198.
10）道徳に関しては、感情を動機としてはならないことがカントによって強調されている。『実践理性批判』第一部・第三章「純粋実践批判の動機について（Von den Triebfedern der reinen praktischen Vernnft）を参照。
11）カントは感性（Sinnlichkeit）の概念を通常、感覚を生みだす能力に限定しているが、このように感情が感性に属すという叙述もみられる。
12）Ms, 6, 211～212.
13）細谷昌志,『カント　表象と構想力』, 創文社, 1998, P.10.
14）Ku, 5, 217～218.
15）Ibid., 217.
16）Ibid., 203.
17）Kuの§9にこれらの語が見られる。
18）Ku, 5, 218.
19）Ibid., 5, 219.
20）Ibid., 5, 222.
21）Ibid., 5, 189.
22）Ibid., 5, 185～186.
23）Ibid., 5, 187.
24）Kpr, 5, 161.
25）Ku, 5, 197.
26）Ku, 5, 353.
27）Ku, 5, 353.